



ららばい、通信

Lullaby News

2025年
春号

特集 親と子の絆



画／大野隆司

[目 次]

- | | | | |
|---------------------|------------|------------------|-----------|
| ■ 唄のページ | …1 | ■ 「すてられたカン太とビン子」 | 川島 俊六 …14 |
| ■ 特集「親と子の絆」 | …2 | ■ 連載／日本子守唄紀行 | 鵜野 祐介 …16 |
| ・親と子をつなぐもの | | お月さん桃色（高知県大月町） | |
| ・雨の日の思い出 | 三田村 慶春 | ■ 連載 | 帯津 良一 …18 |
| ・子守唄は心のふるさと | 井上 瞬 | 二つの懐かしきキャリア | |
| ・子守唄と仏教 | 関 好正 | ■ 連載／直島便り | 山根 光恵 …20 |
| ・関わるということの大切さ | 佐々木 宏幹 | 私も島の案内人 | |
| ■ 連載／わらべうた 童謡 詞華抄10 | 西舘 好子 | ■ 活動報告 | …21 |
| 手鞠ツコ 兎角子共達 続 | 尾原 昭夫 …8 | ■ 寄付者名簿 | |
| ■ 連載／子ども虐待は、今 | 川崎 二三彦 …12 | | |
| 障害児の虐待死 | | | |

特集

親と子の絆

親と子をつなぐもの

絵本＆カフェ
おばあさんの知恵袋・主宰、 三田村 慶春
語り手、絵本作家

人がある行動を起こそうとする時、それまでに学習した経験をもとにして、新たに得た情報がその動機となりますが、そこには結果として少なからず利害が発生します。一方、親子、夫婦、兄弟姉妹等の家族、またごく親しい人間関係の間では、ほとんどの場合、結果の利害を厭わない感情が行動の動機となります。これを「情報」に対する無意識の「情動」として考えてみることにしましょう。

「家族」は社会を構成する最も小さな単位ではあるものの、血縁という目には見えない無意識の情動によって、その関係性が認知され、また行動が選択されるがため、強い信頼関係が醸成されてきました。大袈裟に言えば、この家族という無意識の情動のつながりによって、太古からの人類の歴史が刻ま

れてきたとも言えるでしょう。

さて、現代社会に眼を移してみます。この40年ほどの、さまざまな電子技術の開発、発展は目覚ましく、今やその技術は私たちの暮らしのあらゆる場面に浸透し、社会は大きく変貌してきています。そのことを否定するつもりはありませんし、無視することも不可能です。

とりわけ「デジタルネイティブ世代」と呼ばれ、生まれた時からその技術に囲まれてきた世代にとって、自らの選択する行動の動機には、デジタル機器から受容する多様な「情報」が大きな働きを占めていると言っても過言ではありません。

その逆に、家族の一員として、また《多くの》経験値を持つ親には、ここで「子どものためを思っ」て、情動が働き始め、子の得た情報との間でズレや世代間の葛藤が生じます。デジタル機器から発せられた、奥深く広々と見える未来社会の情報と、狭小とも見える親からの提案の間でデジタル世代は息を苦しめてしまっているのです。

では、このような葛藤を生じさせず、親と子に本来備わっていた信頼関係を回復するには、どのような



子守唄 わらべうた学会
りんごのき文庫より

な方法が考えられるのでしょうか。

親と子が、その血のつながりを以て信頼関係を保つことは、先ほど述べたように、これからの歴史を繋ぎ続ける、他に換えがたい素晴らしいことです。ところが、ともすれば「親子なのだから」という情動に突き動かされて、対面する課題を冷静に見詰められなくなる場合も訪れます。この時必要なことは、親子はそれぞれに、相手を一個の人格として認め合った上で、共に課題を解決する方法を提案し合うことに尽きるのではないかと思います。

さて、この12月、オーストラリアでは、16歳未満の子どもにはSNSを禁止する法が制定されました。また米国小児科学会では、「24カ月未満の幼児には、過度な映像媒体の視聴時間を避けるべき」との提案が出されています。

デジタル機器をクリックして受ける情報は受動的な行為の積み重ねの結果でしか過ぎません。他方、声に耳を傾ける、共に本のページをめくる、わらべうたのリズムやメロディに体を預けることは能動的な行為の積み重ねです。幼児期に多くの時間を受動的に過ごしたか、それとも情報を得るため積極的に活



子守唄は心のふるさと

エッセイスト 関 好正

動したかの経験の違いは、体感として身体に記憶され、成長期に大きな差となって顕現するはずで。幼児期に、親を始め身近な大人たちから充分に、語りかけられ、わらべうたを聞かされ、共に絵本を読んでもらった子どもたちは、成長の過程でイジメや虐待、生きる困難に出会ったとしても、心の奥に閉まっておいた記憶が、必ずや明日への生きる希望、力として蘇ってくるでしょう。

家族という信頼で繋がる本来の情動が、このようにして醸成されることを願っています。

雨の日の思い出

エッセイスト 星野 郁

四月の初め、春の日々が訪れたかのように快晴だった。ところが、一回雨が降ってしまったら、あの快晴がウソのように、それから天気が崩れ。雨が定番になってしまった。

そんなある日。今日も雨かあと家の窓を開けた時、小学生が傘を差しながら登校しているのを見て、ある雨の日を思い出した。それは、僕が小学一年生の時だった。死んでしまった父と二人の、最初で最後の登校になった。

その日は母が学校の交通安全の行事で旗を持ち登校の子ども達を誘導する係だったので、母の代わりに父が僕を連れて行く事になった。母が先に家を出て僕らが向かう頃には外は大粒の雨が降ってい



りんごのき文庫より

た。母が出てから少し経った頃、父と僕も支度をしてお家を出た。父は傘だけさして雨具はつけていなかった。僕はランドセルを背負いその上からレインコートを着て傘を差して行った。家を出て少し歩いている時、父が僕の手を握ってくれた。つないだ手に雨が落ちた。

それからは、だまって学校へ向かった。学校に着く時、ずぶ濡れになりながら子どもを誘導している母が立っていた。母を見つけた父が、僕に話してきた。「手を振ってあげよう」と。僕は手を振り、それに気づいた母も手を振った。手を振っている母の元に僕は走り、父も母の元に走った。三人で笑顔で談笑していたら、チャイムが鳴り、僕は急いで校舎の方に向かった。母と父に「いつてきます」と言いながら、それが僕と母が見た元気な父の最後の姿だった。

臃げな記憶があります。2、3歳のころの記憶です。その時、私は母におんぶされていたと思います。母は私の身体を軽く叩きながら小声で何かを歌っています。その心地よい旋律に導かれ、私は寝入ったのでしょう。記憶はそこで途切れます。

その記憶が蘇ったのは数年たってからです。母が弟に添い寝をしながら、優しい小声で「うねんねんころりよ、おころりよ……」と歌っていたのです。その瞬間、幼児の時に聴いた旋律と、今聞いているそれとが、完全にマッチングしたのです。この体験、子ども心にも、妙にうれしく、母に合わせて、その唄を歌った記憶は鮮明です。

後に知ったことですが、この唄は「江戸の子守唄」でした。江戸時代から歌い継がれてきた代表的な子守唄、祖母も母もこの唄でわが子をあやし、育ててきたのでしょう。

人生の最初に聴いた歌が、優しい親心にあふれた子守唄だったことが、私の人間形成に何らかの影響があったと思っています。子守歌は「心のルーツ・心のふるさと」です。

佐々木宏幹先生を偲んで

佐々木宏幹先生とお会いしたのは仏教企画の対談での事、主幹の藤木隆宣氏の御引き合わせでした。大変偉い先生にお会いしながら私は一方的にまくしたてて、先生はうなずき、相槌を打ち、終始笑顔を絶やさず謙虚なたたずまいを崩すことはありませんでした。本当に恥ずかしく消え入りたい思いで後悔のまま今に至っています。昨年お亡くなりになったと知り、取り返しのかない思いでいっぱいです。

書齋を整理していた折に先生との対談のまとめの草稿が出てきました。懐かしく、ここに採録させていただきます。深く深くご冥福をお祈りします

佐々木宏幹（1930.5.17～2024.2.26）
日本の宗教人類学者、宗教人類学・宗教文化論・シャーマニズム研究の第一人者



りんごのき文庫より

子守唄と仏教

佐々木 宏幹

西館さんが『子守唄』に魅かれた動機は頻発していた幼児虐待にあったという。

「息子が母親を撲殺する、祖父母を殺めるなど、思えば日本の従来の家庭の形は崩壊していったようです。家庭が殺傷の場になるなんて異常事態、世も末の現象です」

と子守唄協会設立10周年記念冊子に述べておられた。

その記念号には協会会長の東大名誉教授の小児科医小林登氏も寄稿されており「自分がこの運動に参加したのは子守唄によって、子育て支援だけでなく、家庭や社会に優しさを取り戻し、人間関係の心の絆を結び直すことができる考えたからである。子供はいつでもどこでも危機にあるのである。我々が当面している現在の子どもの問題を見ると、社会が豊かになったが故に、何か人々に「優しさ」「思いやり」などの「共感」がなくなり、人間関係が希薄になったのがその原因のように思える。

「すべての人間関係は母子関係から始まる」

母子の心の絆は我々が人生で持つ色々な人間関係を創る心の絆の原型なのである。

それを創る「子守唄」には、特にリズム、メロディ、などの音楽的なものに、何か特別な優しい力があると思う。みんなで子守唄を歌って、子育てを応援し、

犠牲になった遺族にどう接したらいいか、言葉を失う惨状に度胸さえむなしくなったという。思いあぐんだ末に思い至ったのは「唄」であった。

車での移動中や火葬の待ち時間に思い浮かんだ言葉を断片的に書き留め、その歌詞をシンガーソングライターの尼僧やなせなさんに曲をつけてもらった。聞いた人が3分もたたないうちに涙したという。

町の灯はきえた

人のうめきを聞いた

風はあてなく吹いて

黒い絵の具の大地

月の光こそ 夜空の涙のしずく

眠りなさい

きのうの思い出 忘れて

哀しみを抱いて

私はずっと祈ります

忘れません

だから千年たったら めざめなさい

あなたが最後に見たはずの 小さな花が

きつとここに咲いている夢想を信じて

この歌は生者の死者への思いであり、語りかけであり、鎮魂歌である。

僧侶が被災者に向かって説教しても涙を流して聞く人はほとんどいない。緊張と絶望と疲労の先に涙さえ枯れはてた人の心の「魂の呼び戻し」と私は思う。まさに歌の力、早坂氏も「歌にある種のエネルギーをもたらす力がある私はこれを「歌力発電」と称すると述べている。

家庭も社会も「優しさいっぱい」にしようでは有りませんか」と提言しておられる。

その通りと言わざるを得ない言辞である。子守唄に「何か特別な優しい力がある」という指摘もすごいといふべきだろう。

西館さんとの対談で私は聞き役に徹してしまったが充分納得しその要点をまとめてみたい。

1 子守唄は即興詩であり、子供に語り掛けながら歌う唄である

2 「三つ子の魂百まで」三歳までに体で覚えたものは誰にも奪えない。刷り込みの極致はその子の原型、生涯を決定してしまうほど大きい。

3 沢山のジャンルの歌が入った今、生活様式が多様な今、子守唄は古い、トロイ、寂しいといったマイナーな位置づけになってしまった。今は母親が伝えるのは無理かもしれない、祖母に唄われたという記憶は、孫に祖母が歌うということがなければ孫は一生聞くチャンスはないかも。記憶している最後の時代が来ているかも。

4 基本は「念」念仏の祈りから伝い継がれてきたのではないかと思う。お寺の御詠歌の旋律が安心と眠りをよんだのでは。

5 お寺を「命の館」に位置付けたい。虐待と犯罪、異常と正常の差がなくなった今こそ、祈りをみなおしたい。

そんな要点になるでしょうか。協会の「子守唄憲章」は

私のこもりうた

私ごとで恐縮だが私は三歳にならないときに父母をなくし残念ながら子守唄を母から聞くことはなかった。しかし、「ねんねんころりよおころりよ」という江戸のこもりうたというのは知っている。いつ覚えたのかは知らないが、自分史に興味があるところである。しかし、唄を歌ってくれたひとはいる。私は母方の祖父母に育てられ幼年期を過ごした。祖父の寺にハルさんという五十代の男性が寺男をしていた。

一人ぼっちの私を可愛がってくれ、女性のお手伝いさんが二人もいたが、おんぶもだっこもハルさんだった。ハルさんが口ずさんでいた歌が私の子守唄だった。

後で調べてみるとそれは「ヴェニスの舟歌」という大正14年に作られていた。

意味など分かったらうはすはなく、しかし、れっきとした日本の演歌、80年たつた今でも空に月を仰ぎながら歩くときには、思わず口ずさんでいる。

歌は移ろう季節と人や鳥との別れの歌は、仏教の無常を感じさせてくれる。

私にとってはいつでも帰れる世界「唄」の中にあるのだろう。」



りんごのき文庫より

関わるということの大切さ

西館 好子

汗だくで帰宅した少年に「冷たいの飲んでいきなさい」と声をかけたのをきっかけで我が家によってくるようになった彼は当時小学4年生。我が家の大きなテレビを目にして、ゲームをするようになった。そのうちすぐに玄関から突進すると、挨拶も行儀もなくテレビに向かう。それからは釘付けでゲームに夢中になる。暗くなっても帰らない。

「無限に、無限にやっていたい。少年院や刑務所でゲームが許されるなら殺人を犯してもいい、ゲームですか、スピード感と知能と技術が伴わなくてはできませんよ、それにセンス、同じ答えは出てこない。判断力と想像力がなくてはね」

と彼は言う。生活の中で最優先されるものらしい。画面の前から動きたくない。おしっこはペットボトルにすればいい、親の叱責や他の助言など馬耳東風、まさに「病氣」としか言いようがない。親や学校の話は何一つなく、ゲームのできない教師と夜中に自室でコンピューターとむきあっている親を「奴らは抹殺対象人間」とうそぶいている。

コロナ最盛期の頃で朝からやってくることに業を煮やした私は学校と親に連絡してみた。「学校の成績は普通なので：とりあえず教育委員会事案として」という教頭。「うちの子は嘘つきなので気にしないでください」という親、ともに「お宅に入れないでください」が答えのすべてだった。

だろうか。人間は人と人との間で生きるという原則に乗っついてすべてとかかわりを持つことで生涯が決まってしまうのだ。機械とだけ関わり、発信される多情報に振り回され、支配され、真偽や必要かを別にして動かされている自分自身になってしまったら、「私」という旅人はどこに行ってしまうのだろうか。かくいう私もスマホを忘れて外出するとすごく不安だ。私自身の情報はすべてこの中に入っているから故障や電源が切れば私という存在も瞬時になくなる。

現に何日も連絡取れない友人は、音信不通になった時点で亡くなっていたり、指先ひとつでポンと肝心の原稿が消えていたり、納税もれなどびっくりしたり、その真偽は笑い事では済まないことばかり、こんな時代はどう生きる対処をしたらいいのだろう。

他者と交わって生きる、五感を感じて生きる、フィクションは消えるが現実が消えることがない、生きるということはお互いに命と命のともなり（共感）があって初めて実感できるものだという基本を持つことが大事、そこから心に響く言葉や安らぐ音楽を感じ取ることができるはず。喜怒哀楽があつて、ふれあいがあつて人生は織られると私は信じたいと思う。

人間は叡智の限りに生み出したものは消し去ることも飾っておくこともできないと百も承知しているが、あらゆる知識頭脳を含有し、受信発信自由、音、映像、色彩。地球の隅々から宇宙、世界に共通、ニュースの即時報道可能 おまけにコンパクトで綺麗、持ち運び簡単という、そんな機械は、発展すればするほど人類を滅ぼすかもしれない。まさに両刃の剣というのはこのことなのかもしれない。



りんごのき文庫より

いつの間にかゲーム場と化していた責任もある。もう来てほしくないことは伝えた。「狭いんだなあ考えが。多様性じゃないよ」少年は言った。気味悪くなった。私はドアを開けなくなったがしきりに呼び鈴はなり続け、時にペランダの前にたたずむ姿を何度か目撃したが、無視することにした。

つい先日たまたま道で少年にあった。「どう、学校面白い？」「愚問、何を面白いの対象にしているの？教育かぶれないでよ：何か質問あればメールして」挨拶もなく少年は去った。メール下さい、確かにあう人から同じセリフを聴くことは多い。それは今は大人の世界だけでなく子供の世界でも共通用語になっているのだろうか。

既に機械文明の現在は便利で手取り早いことがすべてになっている。便利という手段、手段の万能化、心も体も持たないスマホなどは、すでに生活の必需品。「何でもやってくれるし、整理もしてくれる、間違えということをしませんが、煩雑で複雑怪奇な人間の処理能力が一掃されます。」という人もいる。しかし、機械や、コンピューター、スマホなどが、大人になってから暮らしに入ってきた私のような高齢者は「使いこなす」など本当に難しい。私には到底できない。札束の数より多いカードにあたふたし、今度はマイナンバーに一括されると、その使い方もまちまちとあつて、都度、暗証番号、IDだ

と記憶にとどめていなければ生活できない。と苛立ちを日々覚える。ああ、私はシーラカンスだ。

「機械さえ操れば面倒なことをしなくていい、挨拶はお世辞もいらぬし、無駄な会話をしなくて済む。愛想も気苦労もせず喜怒哀楽も関係ない。必要なことを必要に応じて処理し、前に進めていく、便利で合理的で時間も短縮できる。嫌なこと嫌いなこと不得手なことから解放される、コンピューターは見事な自分の味方分身として扱う価値のあるものです」と明言する人も実は増えてきている。

そこで、この万能情報という機械文明の事を考えてみた。時代は刻々と変わるのとはわかってはいるが、過去においてまったく例を見なかった変化だ。よく取れば人間の繁栄の結果、その発展と進歩は留まるどころか、AIなどはさらに物言わぬ機械に更に心や表現まで作らせようとしている。医学や科学の分野、人間の力の及ばない世界での機械化の恩恵は、充分ありがたいが、行き過ぎれば人間の代わりに機械が戦争を始めるかもしれない。

極論からすれば、人間がほとんど肉体労働をしなくても豊かに生活できるような社会になれば人間は初めて経済物質文明から解放されるかもしれないが、精神性との調和ははたして図られるかは疑問だ。

人間として生きることわり(存在理由)の基本は、精神と身体との調和がとれていなくてはならないはず。人間個人としての心身のバランスが取れなくなっていくことはないだろうか。共に病的では、豊かな精神性も育ちえないし、すべてに均衡を失い、分裂し、道徳など考えたり、はては、人として人間として崩壊し、獣的な性格が出来上がってしまうのではない

絵はがきが
届きました



田島葉子

群馬県 田島タイヤの専務

いつも日本子守唄協会に季節の絵手紙を送ってくださいます。



手鞠ツコ 兎角子共達続

わらべうた 童謡 詞華抄10

わらべうた研究家 尾原昭夫

揚げ鞠と突き鞠
明和・安永頃 磯田湖龍斎画 筆者蔵



湖龍斎の手鞠絵

今回も引き続き、鷺伝右衛門保教写『鷺流狂言伝書』記載の「兎角子共達」から「手鞠ツコ」を取りあげる。
冒頭に掲出の錦絵は江戸中期、明和・安永頃に描かれた磯田湖龍斎（磯田トモ）の作品。この豪華な絵の見事さはもちろんではあるが、ここではその揚げ鞠と突き鞠の二様の手鞠に注目しておいていただきたい。

○これは文禄慶長のころの絵なるべし。時代の考へ別にあり。むかしはかくのごとく、手鞠をつくに立（ち）てつきたりき。わらはのひざつきてつくは、ちからのたらぬゆゑなるべし。

○手まりは蹴鞠よりうつれるわざなるべし。しかおもはるゝことは、ちかきむかし、寛永、正保のころの絵に、四人立（ち）むかひて、まりをつくさまをかけり。下にいだせるを見るべし。今も田舎にては、正月五人十人立むかひてつくとぞきける。これ古俗に残れるならん。

「東かゞみ」に、手鞠会とあるも、それに符合せるがごとし。又今、手まりつくに、ひふみよとかぞふるは、もと一二よりいでたるわざなるべし。

○「吾妻鏡」貞応二年の條に云、「正月二日、於三若君御方（わかぎみのおんかた）において、有手鞠御会（てまりのごかいあり）」、（中略）かゝれば、室町家のころまでも、会して手まりをつくとありしなるべし。

（筆者注、『吾妻鏡』は鎌倉幕府前半を扱った歴史書）

京伝のいうように、この四人が向かい合う手鞠は、まさに前回述べた蹴鞠の形を思わせる。

また、『骨董集』の解説にある「一二」というのは、鎌倉時代中期の『源平盛衰記』に、「庭上走り下りて同じ程なる石を四とり持て、目より下にて片手を以て数百千の一二を突き、左右の手にて数百万をつき、様様乱舞して、をうをう声を



手鞠会
江戸前期 寛永・正保頃 『骨董集』

ちなみに、大田南畝原撰『浮世絵類考』によれば「湖龍斎。俗称磯田庄兵衛、小川町土屋家の浪人なり。西村重長の門人となり、東都薬研堀の隠士と画名を誌せり。錦絵を細長くつぎ、吉原遊女画などを多がきて表具し、俗に柱かくしと云、聯の如くにしたる絵多し。此頃専ら流行せしものなるべし。」とあり、最近のNHK大河ドラマ「べらぼう」葛重栄華乃夢斬で、かけだしの葛屋重三郎が、湖龍斎の描く吉原の花魁に新しい趣向の衣装を着せた大判の錦絵『雛形若菜初模様』を呉服商仲間に披露する場面が注目を浴びたのも記憶に新しい。

古典にみる手鞠の変遷と考証

ここに示す安土桃山時代、文禄・慶長の頃とされている手鞠の絵は、明治の日本画家、水野年方の作画。これはおそらく、江戸後期、山東京伝著、文化一〇年（一八一三）序の『骨董集』記載の「屏風絵からきりぬきたる図」とする図に基づいた美しい再現図であるが、原本で次のように付記する。



手鞠
安土桃山時代 文禄・慶長頃 水野年方画 筆者蔵

挙げて、よく一時突いたり」と見える技であって、これがのちのハいしなごVやハ品玉V、さらにはお手玉、手鞠のハ揚げ鞠Vに通じるものと考えられる。

なお、鎌倉時代の物語『石清水物語』に「中納言は宮の御かたに参り給ふついでに、ひむがし対（むか）おはして、さしのぞき給へば、わかきこたち手まりつき給ひて」などとあつて、すでに手鞠が子どもの遊びとして行われていたことも確かである。

喜多村信節著、文政一三年（一八三〇）自序『嬉遊笑覧』では、「一二」および手鞠のハ立ち鞠Vとハ跪き鞠V、「手鞠唄」について次のように記す。

○「一二」とは数を算ふるをもて名とす。これつくといふ事の本義にて、今のごとく手鞠を地にうち返しくするをいふは名の移りたるなり。今田舎人立まりとて四五人ばかり立むかひ手鞠弄（もよ）ぶは蹴鞠の体を学べるにや。

○昔は都鄙ともにみな立まりにて、女子も庭に走り門に立て弄（もよ）びしが、後には、さるべき人の娘は家の内にて遊ぶに立毬はしがたく、跪きてつきたるが都人の風となり、立まりは田舎にのみするやうになれり。

○柳亭子云、宝暦年間に尾州侯の鷹場の所々を記し、（見聞愚按）と云ものに、山口の観音、椿山の條下に、江戸及河越にてうたふ手まり歌とて、

鎌倉へのぼる道に

椿うゑてそだて、

日が照らば涼み処

雨の夜はやどり木

云々あり。江戸には此歌絶たり。今も河越にてはこれをうたふ。「天然へのぼる道に」と云ひ、其外異同あり。（筆者注、「柳亭子」は柳亭種彦、「河越」は現埼玉県「川越」をさす。）
次は、喜田川守貞著、嘉永六年（一八五三）頃成『守貞漫稿』の記録。

○今製の手鞠、大・中・小、種々ともに蚕糸をもって巻き飾る。その

『母の手毬歌』 柳田國男著
芝書店 学友文庫 1949

柳田國男の
『母の手毬歌』



揚げ毬
野口義恵画 『母の手毬歌』より

日本民俗学の創始者柳田國男は、子どもの民俗にもなみなみならぬ温かいまなざしを向け、じつに多くの貴重な著作を残している。本稿に関連する手毬の考証だけでも、その著『民謡覚書』『村と学童』『母の手毬歌』などに長大な論稿があるが、ここではその紹介のみにとどめておこう。

そのうち、『母の手毬歌』の中核をなすのは、自身の子ども時代に母がうたい遊んでみせた「揚げ毬」の手毬唄である。次がその歌詞のみを論稿から抜き書きしたもの。何とそれは幕末から明治初期にかけての時代に、関西兵庫県の山間部に伝承された、先ほどの「鎌倉へのぼる道」の類歌であったのである。歌詞の前の解説の一部も抄出する。

「母は自分でも娘の頃というものが、大へん短かかったと謂つて歎いて居た。（中略）まだ十幾つの幸福な小娘だった頃に、こういう手毬歌に夢中になつて居たことが有るのであらう。ともかくも歌の言葉があまりに古風なものだから、何処でもそれを知つて居た女たちは皆居なくなつて、近年の採集には洩れたものと思われる。」

「片仮名字を用いた部分は特に言葉を長く伸ばして歌うところである。揚げ手毬を高く揚げるたびに、文句にも力を入れて時間を合せるので、それが女の子たちにはこの上も無く面白かつたのである。」

糸、五彩を交へたり。中心、蛤殻等砂を入れ、これを振るに音あり。貝殻の表には、ほそき銅屑をもつてこれを包み、その表に真綿を包み、その表に五彩糸を巻く。大なるは直径六、五寸、小なるは五、七分なり。この五、七分の小なるは、京坂にて、かんや手まりと云ふ。拍用にあらず。小鞠二、三顆を片手に持ち、一つを揚げ、落ち来る間に、残れるを揚げ代ふる戯なり。

○近世、京坂手毬唄、数章あり。その一、二を載す。
「ひいふうみいよう、御代のあねさん、かうとおかいち、ならの都は、おとすなおとすな、丁百丁百、てうど百ついた、ひいふうみいよう」と返す。（中略）

近世、江戸の手鞠も数章あり。これまたその一、二を誌す。
「ひとつとや、ひいとよあくれば、にぎやかに、にぎやかに、かあざりたてたる、松飾り、まつかざり。ふたつとや、ふたばの松は、いろようて、いろようて、三がいまあつは、かづさ山、上総やま。」（中略）（あるひは曰く、十二ヶ月の手鞠歌は、宝暦九年に行はると云へり。）

手鞠唄「鎌倉へのぼる道」

上記『嬉遊笑覧』記載の江戸及河越にてうたふ手まり歌「鎌倉へのぼる道」については、私には特別の思い入れがある。住まい（国分寺市）の近くに鎌倉街道が南北に走り、国分尼寺跡のすぐ北に切通しも現存する。さらに北へ行けば、新田義貞鎌倉攻めの際の久米川、小手指（東村山市・所沢市）の古戦場、そして狭山丘陵に囲まれた多摩湖・狭山湖の間（西武球場の近く）に行基菩薩開基とされる千年の古刹、吾庵山金乗院つまり山口観音が鎮座し、かつて参詣もした。続く丘陵地を西へ、寺竹（入間市）には釈行智の子息富丸赴任の明楽寺竜藏院があり（現在廃寺）、行智が晩年寺に逗留して近辺の地誌・民俗を詳細に記録している（甲子夜話）こと。さらに、幸いにも私がこの手鞠唄の類歌「天竺へのぼる道」を東京の西郊八王子で採集・採譜

していることなどつながりが深い。ここに採集・採譜の歌詞と楽譜を載せるので、ぜひその古雅な曲調を味わっていただきたい。

天竺へのぼる道へ 椿よ植えて育てて
日が照りやば 涼みどころよ
雨が降れば雨宿
雨宿の茶屋の娘は 天下一の機織り
一つでは 乳を飲み候、二つじや乳を離れて
三つでは水を汲み候、四つじやよい茶を出し候
五つでは管を巻き候、六つじやころ機織り候
七つでは綾を掛け候、八つじや錦を織り候
九つではここへもらわれ 十じや殿御に受けられて
まずまず一貫貸し申した



東京八王子手鞠唄
安藤エイ（明治二一年：一八八八生まれ）伝承
（楽譜）



手毬
喜多川歌麿画 『四季之花』



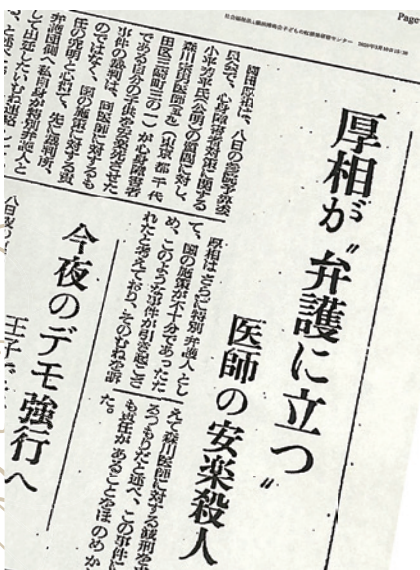
（左）揚げ毬 西川祐信画『絵本浅香山』
（右）紐付き手毬 西川祐信画『百人女郎品定』

あれ見イやれむうこう見イやれ
六まい屏風にすうごろく
すごろおくに五オばん負けて
ニイ度と打つまいかアまくら
鎌くうらにまアいるみイちで
つうばき一本見つけた
そのつうばきだアてのつうばき
御寺へもオててそオだてた
日が照エればすうずみどころ
あアめが降ウればやめどころ
そのあアめに降りこめらアれて
お茶もいやいや煙草もいやいや
しよんがいなア、しよんがいな。
しよんがい婆アばさん
こオとし九ウ十九で、くウまアのへ
よオめりしよとおオしやる……
しイらが（白髪）三イすじにたアけエながかアけて
おオくば（奥歯）ニイまいにベエにかねつウけて
こオれでよオいかとお爺イさんに問オえば
そオれでよオいよい嫁入しよとらアくじや
やアまをとオおればいイばらがとオめる
かアわをとオおれば船頭さんが止オめる……



手鞠 破魔弓 羽子板
元禄時代 『大和耕作絵抄』

読売新聞1968年4月8日付夕刊



であった。本件は国会でも取り上げられ、当時の園田厚生大臣が、「被告人医師が心身障害者である自分の子どもを安楽死させた事件の裁判は、同医師に対するものではなく、国の施策に対する責任の究明と心得て、先に裁判所、弁護団側へ私自身が特別弁護人として出廷したいむねを連絡してある」と答弁をしている。今では到底考えられない驚きの発言だ。さすがに大臣が実際に法廷に立つことはなかったと思われるが、本事例は、家族が困難の全てを背負ってきた社会を象徴するものであり、換言すれば、障害児者に対する施策のなさの象徴として大きな関心と呼んだのであった。なお、本件は心神喪失として、医師は無罪となっている。

連載 12

子ども虐待は、今

障害児の虐待死

子どもの虹情報研修センター 川崎 二三彦

3歳男児の餓死事件
「即刻公務員を辞めろ、責任を取れ！」
「お前も飲まず食わずで1週間過ごしてみたらどうだ」

かつて私が勤務していた京都府で、3歳男児がネグレクトによって餓死する事件があった。排泄が自立していないことにストレスを感じた父母が、「この子、食べるの好きやし、食べられへんかったら、おしっこ言うんやないか」などと考へ、食事を与えていなかったのである。本事件が報道されると、事件を防げなかったとして、関わりのあった児童相談所に全国から千件を超える抗議の電話やファックスが集中した。死亡事件にショックを受けながら苦しい思いで日々の業務を行う当該職場だけで対応できるものではなく、私も同じ児童相談所の職員として電話対応の一部を引き受けたのだが、朝から晩までひっ

きりなしにかかる抗議の電話に、正直かなり苦慮した記憶がある。実はこの時、私は子どもの虹情報研修センターの研究部長となることが内定していた、後ろ髪を引かれる思いで京都府を退職したのであった。

虐待死の研究

こうした経緯もあって、虐待による子どもの死は、以後の私の大きな関心事となり、虹センターに赴任すると、さまざまな形で虐待死に関わることとなった。多くの自治体から依頼を受けて個別の死亡事例検証に関わり、虐待死で逮捕された母親の公判



家族が困難の全てを背負ってきた社会

そして、今般出版に至ったのが、『障害児の虐待死問題』である。

本書の全てを過不足なく説明するのは難しいので、ここでは各種文献を渉猟して障害児の虐待死の歴史を辿った第1章から、いくつか事例を取り出して紹介したい。

最初は、1967年に発生した【事例A】^注。医師が重度の障害がある27歳の息子を殺害した事例で、彼は生まれてまもなく脳水腫にかかり、ずっと寝たきりで、独りで立つことはおろか、あまり話すこともできず、食事はもちろん、排泄の世話まで、両親がいつさいの面倒を見ていたの

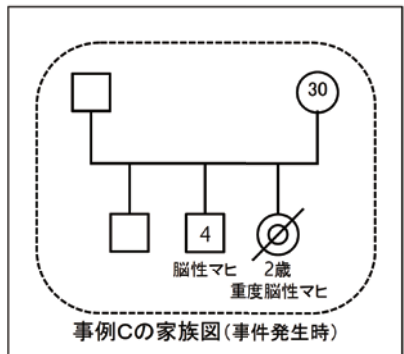
障害のある当事者の叫び

次に取り上げるのは【事例C】。1970年、横浜市在住の30歳の母が2歳の重度脳性マヒの娘を絞殺した事件だ。実は本児の兄も脳性マヒで、母は2人の障害児を抱えて被害児の施設入所を希望したものの、満床で断られていた。そのことが知れると、「神奈川県心身障害児父母の会連盟」は、「施設や家庭に対する療育指導もなく、生存権を社会から否定されている障害児を殺すのは、やむを得ざる成り行きであり、福祉の貧困に抗議する」として横浜市長に抗議文を提出、地元で減刑嘆願署名運動を行った。

ところが、こうした動きに激しく反発する声が上がった。「神奈川県青い芝の会」である。会は、事件後2か月も経たない時期に、以下のようない意見書をまとめる。

「働かざる者人に非ずという社会風潮の中では私達脳性マヒ者は『本来あってはならない存在』として位置づけられるのです」

「たとえ寝たきりの重症児でもその生命は尊ばれなければなりません。本事件の原因を施設が足りないこと、福祉政策の貧困に帰してしまふことは簡単です。しかしそのことによって被告の罪が消えるならば、即ち本裁判においてもしも無



罪の判決が下されるならば、その判例によって重症児(者)の人命軽視の風潮をますます助長し脳性マヒ者をいよいよこの世にあってはならない存在に追い込むことになると思われます」2つの団体は、直接話し合いの場を設けて対話しているが、主張は平行線を辿ったのであった。

不可欠な支援制度、施策

結局【事例C】の判決は懲役2年、執行猶予3年となった。それはさておき、保護者と当事者が対立しても不毛であり、生み出されるものは何もない。障害児の養育を一身に背負う苦労や苦悩は並大抵のことではなく、障害児の基本的権利を保障するためには、障害児に対する手厚い施策はもちろんのこと、養育者を支援する丁寧な対応が必要不可欠であることを、歴史は雄弁に物語っているのである。

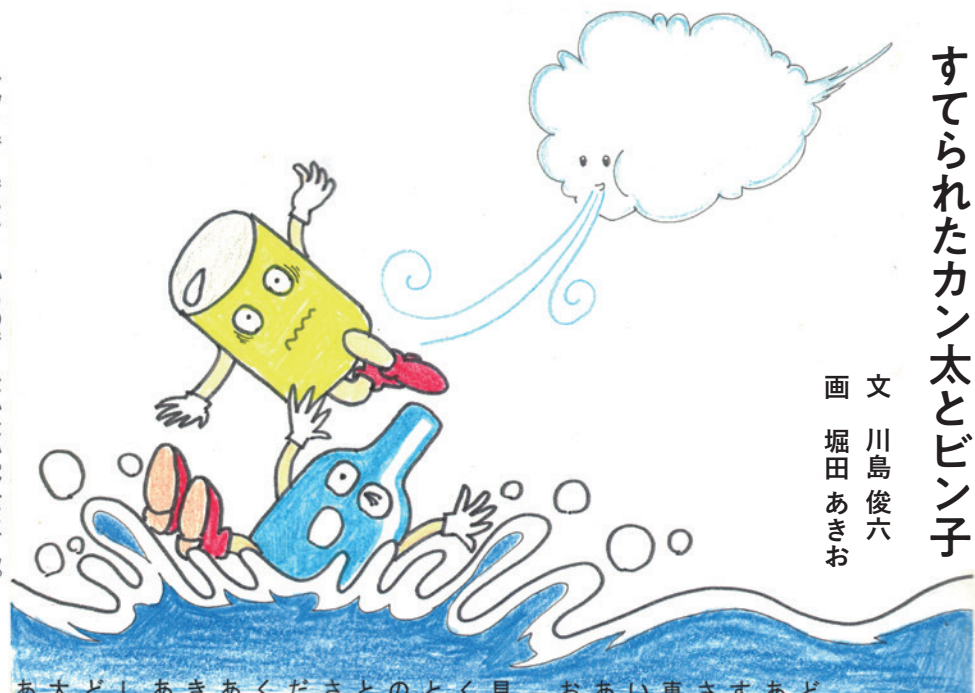
なお、【事例C】が発生してまもない1975年には、第30回国連総会で「障害者の権利宣言」が採択され。「障害者は、その人間としての尊厳が尊重される生まれながらの権利を有している。障害者は、その障害の原因、特質及び程度にかかわらず、同年齢の市民と同等の基本的権利を有する」と謳われている。

本書は、第1章に続き、現在まで続く障害児の虐待死の実情や特徴を示した上で、我が国において障害児支援に関わる各分野の第一人者が、障害児に対する支援のあり方を論じている。関心のある方は、手に取っていただければ幸いです。

(注)事例名称は本書記載のとおりとした。

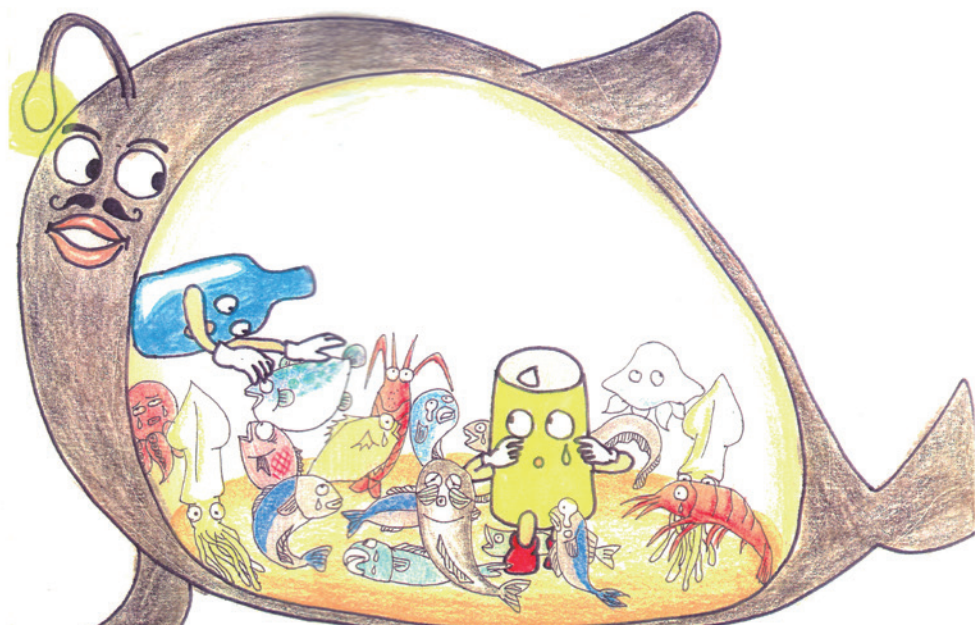
すてられたカン太とビン子

文 川島俊六
画 堀田あきお



ある日のことです。
どての上に あきカンと
あきビンが たくさん
すてられて いました。
さんぽに 来た人や、
車の中から すてて
いくのでしょうか。
あきカンとあきビンは
おもいました。
「だれか ぼくたちを
見つけて ひろって
くれないかな。こんな
ところで ゴミになる
のは いやだよ。」
と 毎日のように
さけんでいましたが、
だれも 見つけて
くれません。
ある日、強い風が吹いて
きて、あきカンと
あきビンは 川に落ちて
しまいました。
どどん 流されて
大きな 川に 出ました。
あきビンは プラス

チックで できて いるので なかなか沈みません。
あきカンとあきビンは ビルの 谷間をぬけ 大きな 海にでました。
途中 たくさんの仲間 に であいました。みんな ぼくたちのようにすてられた
仲間です。海に出て ひっくり返りました。波が 大きく、うち寄せてきます。
そのたびに、口から しおからい 海水が はいって きます。
あきカンは さけびました。
「たいへんだ、ぼくは海水はダメなんだ。すぐさびてくさってしまうよ。だれか
たすけてくれ。」とさけんでいます。



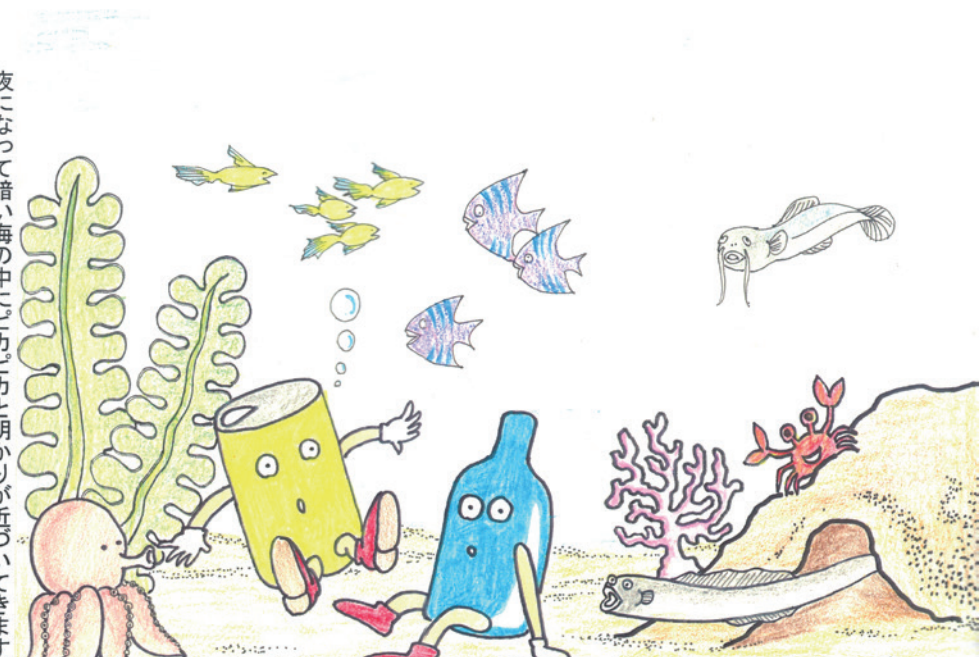
のみこまれたお魚は
アンコのおなかの中で
とけていきます。
アンコはぼくたちを
のみこんで くるしい
のか、時々 バタバタと
あはれます。
「おい！あきカン
だいじょうぶか？
もう ぼくは ダメだ」
見ると カンは さびて
真っ赤になっています。
ある日、アンコは 急に
あはれました。
いつもの時とちがいます。
ポンと 投げ出された
ところは 船の 上の
ようすです。
漁師に つられたのです。
漁師は、
「おお これは うまそ
うなアンコだ！
おなかも張っている。
きつと値よくうれるぞ、
今日は大漁だ！
さあ早く市場にだそう。」
市場の セリに かけ
られました。

一番 たかく セリおとされた アンコは 今度は 箱の中に 氷すめに
されました。
魚屋のおじさんが、お店に 持って かえり、アンコを ひもで つるしました。
「うわ、これは重い、二十キもあるんだ。」
アンコを 吊しきりにしています。
胃袋を取り出し、中を 見て ビックリ。まだタイや アジ、カレイ、エビは
残っています。



「なんだこれは？」
またビックリ。
「カンと ビンまで
のみこんで いるぞ、
たまげたね。
海も よこれて
しまつて ゴミや
ビニールまで のみ
こんで 死んで しまっ
魚が、多いんだ。
みんな 気を付けて
すてないと 海は
汚れて 魚も いなく
なつて しまふね。」
とおじさんはさびしそ
うな板の 上に
あきカンと あきビン
のせて 塩で ましな
してから ゴミ箱に
すてられました。
「おい、あきカン
大丈夫か？」
なんと 聞いても
あきカンは 返事が
ありません。
ぼろぼろに さびて
気を失つて います。
「おい、みんな お願いだから 僕達を そまつに
すてないで くれ。」
と叫んでいます。
とうとう あきカンと、あきビンは 「ミ」として すてられて しまいました。

川島俊六さんは83歳。川越卸売市場「花いち」の店主。
日本子守唄協会創設の頃より、三万坪の浜松の山を「子守唄の里」とする
夢を語ってくださり、看板も立てておられます。
堀田あきおさんは友人の魚屋さん。数年前に亡くなりました。
二人の夢は子どもたちです。二人で作った作品は沢山あります。



ずいぶん 沖まで
来たとき、あきカンと
あきビンは 波がくる
たびに 海水がはいり、
とうとう プクプクと
海に沈んでしまいました。
海の中は 今までに
見たことのないきれいな
お魚が いっぱい
おいでいます。
大きな 岩場には、
タコやウツボがいます。
海の底に 二つとも
ころがりました。
あきカンはシクシク
泣いています。
「ぼくはもうダメだ。
このままとけてしまふ。
君はいいね。
プラスチックだから
いつまでもとけないで。」
見ると あきカンは
赤くさびだしています。
「ぼくだって、ダメ
だよ。字の書いてある
ところが はげだして
きたよ。」
夜になって暗い海の中にビカビカと明かりが近づいてきます。
ちようちんアンコです。タコも エサと まちがえて ぼくたちを ころがします。
それを みて、ウツボが ガリツとかじります。ウツボの歯はとがっていて
ぼくたちを あなだらけにします。そのうち、ちようちんアンコが あきビン
をおきな 口で ぱくりと 飲み込みました。エサと まちがえたのです。
アンコのおなかの中は お魚で いっぱいです。タイやカレイ、エビ、アナゴ、
アジ、あきカンも のまれてきました。
「なんだあきビン、こんなところにいたのか。僕もエサと まちがえられて
食へられたんだよ。」

第12回 「お月さん桃色」 (高知県大月町)

二〇一一年三月の東日本大震災の後、全国各地に伝承されている地震・津波・洪水などの災害から神仏や精霊・妖怪が防衛したり警告したりする説話を調べていく中で、高知県中土佐町久礼の双名島のことを知った。「久礼の浜は、外海に面しており沖に島がないので、海が荒れるたびに大浪が打ち寄せてきては家が流され、船の避難場所もなくて村人たちは困っていた。彼らを助けてやってくれと赤鬼に頼まれた青鬼は、瀬戸内の鬼ヶ島で大岩二つを鉄棒に突き刺して担ぎ、子鬼を連れて四国山地を越え、久礼の港に着いた。青鬼は大岩を担いだまま海に沈んでいき、双名島と呼ばれる島になった。以来、青鬼と子鬼が命を捨てて守っている久礼の港は天然の良港となった」(土佐教育研究会『読みがたり 高知のむかし話』日本標準一九七六より要約)。

作家の松谷みよ子がこの話を元に『うみにしずんだおに』という紙芝居作品に脚色している(絵：二俣英五郎、童心社一九七三)。この作品を入手して、大阪府内の幼稚園で何度も紙芝居を上演したが、いつもとは違う園児たちの真剣なまなざしと、終わった後に漏らす「ホーッ」というため息が忘れられない。そして、最後の場面のト書き「みんながおおきく なったら、四国の久礼と いう みなとへ 行って ごらん。」を語るたびに、自分もいつか行ってみたいと願ってきた。

松谷が高知を舞台にして書いたもう一つの作品が絵本『お月さんもういゝ』(絵・井口文秀、ポプラ社一九七三)である。「昔、土佐の海辺におりのという娘がじいやんと二人で暮らしていた。ある日、嵐の後の浜辺でおりのは桃色珊瑚を拾う。数年後、じいやんが重い病にかかり、熊の胆が病に効くという。おりのは砂浜で出会った狐師の与吉から熊の胆をもらい、お礼として桃色珊瑚を与吉に贈る。その後、姿を見せなくなった与吉のことを想い、おりのは「お月さんもういゝ」と歌うが……」。

お月さん 桃色

誰が言うた

海女が言うた

海女の口よ

引き裂け

(牧園尾正夫他『日本わらべ歌全集22

徳島 高知のわらべ歌』柳原書店一九八一、224頁)

この唄と物語の舞台となった月灘村(現在の太月町)を、久礼の双名島とともに訪ねてみようと思ひ立ち、今年(二〇二五年)二月半ばに現地を訪れた。朝八時一〇分、高知龍馬空港に到着し、そこから空港バスと鉄道と路線バスを乗り継いで、太月町小才角バス停に着いたのが一三時一六分。「お月さん桃色」にちなむ少女の像が立つ小才角休憩所は、バスで通った道を少し引き返したところにあった。



約二メートルの台座の上に実寸大の少女のブロンズ像が立ち、大きな珊瑚を抱き、前方に広がる太平洋の海原を眺めていた。彼女の着物は丈が短く、海女のいで立ちかと思われ、その面影は絵本の表紙にも似ていた。台座の中央にはめ込まれた石碑には「さんご採取発祥地記念像」の見出しの下に歌詞が刻まれていた。像の後方の案内板は経年劣化して上部の四分の一しか読めない状態だった。インターネットの投稿記事の案内板の画像より書き写しておく(「もっともつとTOSA 高知レポート」二〇一一年七月一〇日掲載)。

「土佐サンゴ発祥の地 ここ月灘沖を含めた渭南海岸には、徳川時代から多数のサンゴがあることがわかっていました。一人の漁師が『宝石サンゴ』を釣り上げた偶然が、日本サンゴ史の始まりといわれています。土佐藩では厳重に採取を禁止し、その所在を口にすることを固く禁じました。このことは今なお残る童唄 **お月さんもういゝ** **だれがいうた あまがいうた あまのくちひきさけ** (小才角で唄い継がれてきた唄)にうかがい知ることができます。この唄は口止めされた漁師や子供たちによって唄い継がれたもので、小才角はこの唄の故郷であります。

明治維新後この禁令は解かれ、明治六年にこの付近の海域ではじめてサンゴ船による採取が行われるようになると、サンゴ漁は急速に発展しました。明治二十年代には七百隻もの採取船が出漁し、他県からも多数の船が沖の島周辺にきて採取しました。その結果、『桃色サンゴ』も『赤サンゴ』も減少し、ほとんど中止の状態になりました。そ



の後、五島列島、奄美大島、小笠原諸島や台湾、ミッドウェー沖で漁が盛んになり、当地方では今もなお、加工が盛んに行なわれています」。

一五時三〇分頃、帰りのバスに乗り、宿毛駅に

一六時六分到着。一六時八分発の特急に飛び乗って、土佐久礼駅に着いたのが一七時三五分。駅前に停車していたタクシートの運転手に聞いたが、予約済みで利用できないと言われた。レンタサイクルも営業時間を過ぎていた。双名島まで三〇分見ておけば歩いていけると聞き、次の列車まで約二時間あったので歩くことにした。『うみにしずんだおに』に描かれた激しい風の冷たさをわずかでも体感しながら、海沿いの道を足早に歩いた。二五分ぐらいで双名島に続く棧橋に到着した時には、すっかり日が落ちていた。遠くから見る島は小さかったが、実際に訪れてみると意外と大きかった。コンクリートの堤防でつながった二つの島を渡り、中腹の祠堂にお参りした。

駅前まで戻り、発車時刻まで約五〇分あったので「ファミリー居酒屋」の看板に魅かれて店に入った。おでん七品、ツブ貝の刺身、川エビのから揚げ、そして熱燗一合に舌鼓を打ちながら、この地で生まれ育ったという七〇代と思しきご主人に話を聞いた。すると、双名島の鬼の話はもちろんのこと、「お月さん桃色」の唄もご存じだった。「お月さん」の歌詞はもともと「お月灘」だっただろう、それから自分は「海女の口つうねった」と歌っていたが、「引き裂け」は残酷なので替えられたのだろう、そう話された。ただし、松谷が絵本に描いた海女の少女と狐師の若者との悲話についてはご存じなかった。

翌日、オーテピア高知図書館(県立図書館)で文献検索をした。古くは一九三四(昭和九)年発行の『土佐民謡集 二輯』(高知縣女子師範学校郷土室)に「お月様桃色誰が言ふ、海女が言ふ、海女の口を引裂け」(196頁)と記載されていた。だが、物語(説話)として記録されているものは見つからなかった。松谷は、絵本のあとがきにこう記す。「海辺ではさんご漁や彫刻の話、山ではいのしし狐の話、山分浦分郷分など人びとのくらしがきびしくわけられていた時代のことなど、さまざまの話を聞かせていただくうちに、わたしの中にいつかちんまいおりのの姿が浮かんできた」。

絵本『お月さんもういゝ』は、松谷みよ子によって再創造された「新しい民話」なのだろう。ギリシャ神話「王様の耳はロバの耳」を連想させるこの話が、土佐月灘を舞台とする新しい民話として、子守唄やわらべうたとともに伝承されていくことを楽しみにしたい。

連載

帯津良一

二つの懐かしきキャリア



先日、N県のU市にある大きな病院の65周年記念講演会に講師として呼ばれ、講演をして来ました。何故、私に白羽の矢が立ったのか皆目わかりません。この病院の何方ともこれまでまったく面識がないのです。

ところが、駅に到着してみると、改札口に、なんと病院長ご夫妻と事務長さんのお出迎えです。そして、その足で真っ直、おおきな鰻屋さんに行つて昼食です。あまりのおいしさに生ビールを注文してしまいました。それも中ジョッキ二杯もです。これから大事な講演だというのに、病院長さんはまったく意に介しません。にこにこしながら見えています。

それから万事がこの調子で、非常に温かいのです。会場に着いて講師控え室に入つて一息ついたと思つたら、市長さんの表敬訪問です。もちろん初対面です。いささか緊張の面持ちのところへ、いっしょに入つて来ていた人が、突然前面に出て、

「先生！……私が誰かわかりますか？」

と来たものです。一目見て、すぐにわかりました。

「おおー！君ではないか……」
と同時にほろかなる往時が鮮やかに蘇つて来ました。

私が病院を開設して間もなくの頃です。隣のF市の主婦が訪ねて来ました。

「……小学校4年生の長男が、時々、気管支喘息の発作を起こして、救急車のお世話になるのです。これまで、いろいろ治療を受けて来ましたが、完治はしません。有名な先生の呼吸法でなんとかならないでしょうか？」

それから、その少年N君が火曜日の夕方に、私の病院の気功道場にやつて来るようになります。自転車に乗つて、にこにこしながらやつて来ます。一カ月ほどしたところで、近所の小学校2年生のI君も参加することになりました。こちらの身体の悩みについては記憶が定かではありませんが、二人して自転車を連ねてやつて来ます。二人とも滅多なことでは休みません。N君は小学校を卒業して、東京の中学校に進学したのを機に呼吸法も卒業しました。それからI

君が一人で、これまた小学校卒業まで通つて来ました。

二人共、時々、身体の何処かを掻いたり、道場の畳の塵を竜たりして、必ずしも呼吸法に終始集中しているわけではないのですが、そこは少年の愛くるしさと言うべきか、私は彼らに終始好感を抱いていましたし、彼らの滅多なことでは休まない皆勤賞振りがとても好きでした。彼らが小学校を卒業して病院の道場に現われなくなつても、この好感はずっと続いていましたが、そこは年令も大きく異なれば住む世界も違いますから、それほど頻繁にお会いしていたわけではありません。

そこで、思い出すままに、お二人のその後について記してみよう。思い出すままですから多少の間違ひはお許し下さい。まずはN君です。大学は医学部受験に失敗し、何年か浪人生活を送つたあと、琉球大学の医学部に合格した際、わざわざ川越の病院まで報告にやつて来たものです。当時、年に二回、主として那覇市で、沖縄養生塾を開いていましたので、その都度、養生塾

の幹部の一人の自宅で、しばしばお会いし、酒を酌み交わしたりしたものでした。彼自身もその幹部さんとはごく親しくお付き合いをしていたようでした。

大学を卒業すると、名古屋大学病院の救急部でしばらく働いていました。この期間は東京でお会いしたり、私の馴染みの静岡県は富士市の料理店で盃を酌み交わしたりしたものです。その後、かれが、ある病院のリハビリテーション科で働いている時にお会いしたのが最後ですが、この時の彼の言や好し、

「救急治療の仕上げはリハビリテーションですから……」

と来たものです。

一方、I君は東京大学です。学部は記憶にありませんが、たしか野球部のマネージャーをしていた筈です。そして、大学を卒業してたしかNHKに就職した筈です。講演のために仙台市を訪ねた時、たまたま仙台のNHKに勤めていた彼が講演会場に私を訪ねて来たことがありました。

その後一転、彼は政治の世界に進みます。その間の事情がどのようなものであったか、これまた記憶にありませんが、現在は彼の生まれ故郷を地盤に、自民党の衆議院議員をつとめています。今回お会いした時は、一目見て彼と分かったわけですから、往時の面影をとどめ、じつに若々しく元気な様子でした。

こうして、私の呼吸法教室を卒業した二人が個人的にも社会的にも元氣一杯働いているのを見ると心底うれしくなつてきます。そしてつく

づく思います。わずか五年間で生徒はたった二人ですが、あの小さな呼吸法教室がまぎれもない、わが誇るべきキャリアの一つになってきます。まさに感無量です。

そして、いよいよ講演です。定員の1000人の広大な会場に900人ほどの人々が詰め掛けています。私の演題は「地球の自然治癒力の回復を目指して」エネルギーの極めて高い場のなかで、立ちっぱなし喋りっぱなしの90分があつという間に終わりました。達成感と疲労感の入り交じつた心地良さが全身を充たしています。

控え室に帰つて一息ついたところへ、またまた前にお会いしたことのある人々の襲来です。かなりの人数です。私のことを心に留めていた人々がこうして集まってくれるのですから、まさに感謝感激です。そして、そのなかの一人の中年の女性が、

「私、S予備学校の講義を受けた者です」

と来たものです。S予備学校の講義といえはこれまた、わが誇るべきキャリアの一つです。

医学部進学過程での年に一回の講義ですが、20年間続けました。題して、

「これからの日本の医療と」

求められる医療者像」。

いつも五月頃の土曜日ですが、超満員です。一つの教室では入りきれなくて、隣の教室も一杯です。皆さん、前回の受験に失敗して、来年に希望を抱いて再出発したばかりですから誰の眼もこの上なく輝き、教室全体に真剣さが漂っています。とともにある種の優しさが漂ってい

す。これは皆さんの挫折感の然らしめるところと理解しました。

こうした雰囲気なかで、18歳、19歳といった青年たちの発する質問が好いのです。たとえば、きれいな女性の学生さんです。

「今日のお話のなかで、一番面白かつたのはホメオパシーでした。ホメオパシーは一生を賭けるに価しますか？」

「それは価します。しかし、西洋医学を修めてからでも遅くはありません。まずはご家族の期待に応えることです」

と答えたものです。次いで男性の学生さん、

「あと10年すると、先生は何歳ですか？」

「80歳です」

「80歳かあ、駄目かなあ、いえね、今日のお話は医師になつてから聞きたかつたのです」

と。S予備学校の20年間も私の誇るべきキャリアの一つだったので。

帯津良一 プロフィール

1936年、埼玉県川越市に生まれる。東京大学医学部卒業、医学博士。東大医学部第三外科に入局し、その後都立駒込病院外科医長を経て1982年、川越市に帯津三敬病院を設立。2004年には、池袋に統合医学の拠点、帯津三敬塾クリニックを開設。
日本ホリスティック医学協会名誉会長。著書に「代替療法はなぜ効くのか?」「健康問答」など。その数は100冊を超える。

私も島の案内人



南無庵 庵主 山根 光恵
山口県長門市出身 浄土真宗本願寺派 布教使

あつという間にもう令和7年の三月である。そして今年の冬の寒いこと。北国では観測史上初めての豪雪であるということ連日のようにテレビのニュースが報じている。そしてその雪のすさまじい量にびっくりする。ところによると5メートル以上にもなっているそうです。すさまじい雪の量である。四国の我が家は、朝起きて外を見るとあたたかい日差しである。ところが、外に出てみると、ほほに当たる風の冷たさに思わず身震いをしてしまう。

今年は春から第6回目の瀬戸内芸術祭が行われる予定で、新しくできる美術館ももうすぐ完成の予定らしい。

こんな狭い島に世界一セブだと言われるようなホテルができてお客さんが来るのかな？と経営者でもないのに心配をしたりするが、今年は大阪で万博がおこなわれることもあり、その客を当て込んでというおもむきもあるのかもしれない。島がにぎわって皆が楽しくいるおうことができたならこんなによいことはないかもしれない。

そういえばこんなこともあった。以前、家の前を観光客が「すみませんこの辺りにごみ箱はありませんか？という。」「ああごみなら一緒にすてておきますよ」というと、「おおきなごみばこですけれど」という。「ああ、おおきなごみばこね」と私。それはこの坂をおりて行つて、おりきつたら左に曲がって山道を道なりに歩いていくと桜の迷宮という公園があつて、その道路の左側におおきなごみばこがありますよ。」とおしえてあげた。そのごみ箱は、三島喜美代さんという高齢の作家さんで最近亡くなられたということもニュースで知った。春には桜が満開になるであろう公園の入り口にびっくりするような大きさがごみ箱があり、中にたくさんさんの廃棄物が突っ込まれてあり、さながらごみ箱であるが、中の中は陶器でできている作品である。

私はアートの事はわからないけれど、島の中をよく歩いているので、どこになにがあるというのは、よく知っている。こんな時、日頃ぶらぶら散歩をしていることも役に立つ。

先日、直島ホールのイベントに行くつもりで友達と郵便局の駐車場に車をいれようとしていたら外国人の夫婦が道をたずねてきた。どうやら予約していた民宿の場所がよくわからないのできたかったらしい。スマホで地図を出してくれるが私も友達もくらくらなってきたので判別しにくい。配達から帰ってきた郵便局のお兄さん捕まえてみてもらうと、どうやら知っているところのようなので車に乗せて行つてあげようと思ひ、「乗つて、乗つて」と日本語で言う。どこに連れていかれるか少し不安そうだったけれど、わたしたちを信じて乗ってくれた。

ここではないか？と検討つめた民宿に行くと、民宿のほうも予約客のくるのが遅いので心配していたみたい。「待つてたよ」とゲストもほっとし、女将も、「サンキューサンキュー」とみんなおおよろこび。郵便局のお兄さんも心配してきてくれた。みんな顔を見合せてよかったねーとにっこり。その時、あーせめて簡単な英会話ぐらいいっすり勉強しとけばよかった。80過ぎたら後のまつりかな？でもあきらめないでやってみるかな？とちよつと思つた。

合掌



アートのごみ箱 三島喜美代作

活動報告

■12月

●8日(土)

かはやま由紀シャンソンコンサート

(下仁田ねぎぼうず)

シャンソン界の大御所かはやま由紀さんとピアノの小手川はるみさんのピアノで懐かしいシャンソンの調べを初冬の枯葉舞う日に行いました。

●22日(日)

クリスマスコンサート

(下仁田ねぎぼうず)

レインボーカルテットの美人のママさんたちは皆さん二児の母、クリスマスの歌に楽器当てるクイズやビンゴまで、楽しいクリスマスを楽しみました。



レインボーカルテットクリスマスコンサート

■1月

●11日(土)

山極壽一講演会

(山口県周防大島文化センター)

賛助出演 西館好子理事長

●21日(火)

鶴見和子の着物と日本の部屋

設立準備委員会打合せ

(如水会館)

参加者…内山 章子(鶴見和子さん妹)、小西 道子(姪)、中谷 比佐子(着物研究家)、笠井憲一(日本文化プロデューサー)、藤原良雄(藤原書店社主)



■2月

●8日(土)

「心に祈りをこめて」

イベント

(周防大島文化センター) 出演…西館好子、高橋美晴、相川厚、やまびこコーラス



●22日(土)

子守唄わらべうた学会2025年大会

(京都立命館大学衣笠キャンパス)

講演…山極壽一、ワークシヨップ 京都のわらべ歌、質疑応答

出演…鵜野祐介(子守唄／わらべ歌学会会長)、山極壽一(総合地球環境学研究所所長)、西館好子(子守唄協会理事長)



鵜野祐介

山極壽一



どうりゃんせ

■配食 毎月第二・第四木曜日に実施

虐待防止を契機として、子どもの貧困なんてありえない、それは大人社会の問題と、シングルマザー支援から始まった配食も三年目に入りました。広くは女性の自立支援の一環として相談や仕事などの紹介もしています。先日、SNSに「物さえくれればいい、個人情報報は聞かないで」という投稿がありました。とても哀しい思いをしましたが、これからも続けて参ります。

